

先住民族：孤立は共同体を護る戦略である

2024/08/08

国連人権高等弁務官事務所

タグイデ・ピカネライはパラグアイのアヨレオ・トトビエゴソデ先住民族の一員で、人権、環境、土地の権利の擁護に生活のすべてを捧げている。「私たちを特徴付けているのは、私たちは事実上、アマゾン以外の熱帯雨林で外部と接触することなく今も孤立して暮らしている唯一のグループだということです」とピカネライは言う。ピカネライが先住民族の領土を守り、広げたいと願うようになったのは、彼の家族が1970年代から1980年代にかけて、森林伐採のためにパラグアイのチャコ熱帯雨林を追われたことがきっかけだった。チャコという言葉は先住民族のケチュア語に由来し、“狩猟区域”を意味する。パラグアイの西部に位置するチャコは、乾燥・亜湿潤林、砂丘、サバンナ、湿地帯など多様な生態系を有している。「私たちは森林伐採という大きな問題に直面しています。実際、昼夜を問わず森林伐採が行われています」とピカネライは言う。自主的に孤立している先住民族は、伝統的知恵の保持者であり、植民地化されていない。それゆえ、保護される必要がある。国連人権は、先住民族の権利の保護と促進の観点より、これら自主的に孤立の戦略をとっている先住民族に関する啓発活動を進めている。